

中部ヨーロッパにおける農事の諺、

自然暦について

植 田 重 雄

日本の農山村の神社や村の宮座などで正月にさまざまな神占いを行う。粥占い、湯立の神事、綱引きなどが広く知られている。神主や頭屋の人がぶつぶつ呟き、いく度も占いを行って、新しい年の豊凶を問う。これは一度だけでなく何度も試みる。その他雪が沢山つもったとか、厳しい冬であるとか、見慣れぬ鳥の群が村へやって来たとか、さまざまな自然の徴候を見て、一つの予想を立てることが多い。この場合観察と長い間に積み上げてきた経験によって行うのである。

農耕牧畜にたずさわる人々は、その努力の酬いは原則として一年かけて一回である。手工業、商業には別の困難はあるものの、農耕に比べれば天候や自然の障害による災いははるかに少ない。農民は最大限の努力をして畑を耕やし、種子を蒔いて人間の農耕作業を万端なしとげても、なお大自然の恵みなくしては、すべては水泡に帰してしまふのである。大自然という不定で捉えがたい巨大な存在の力を前にして、どのような対処をすべきであらうか。農民にとって収穫は年毎に未来のものである。未来にたいして人間は過去をふり返えり、過去に積み上げてきた経

験を最大限に用いて、未来を予測しようとする。豊年であって欲しい、太陽がよく照り、よき風が吹き、適当な雨が降って欲しい。事実そうでなければ、生活は破綻してゆく。こうした切実な願いのために、占いの神事がある。これは天意、神慮をうかがうことである。農耕の生活は、天候気象だけではない、虫や鳥、野獣の害、作物につく病気もある。これらからいかに守るか、こうした全般的なことは人間の祈願として求められつつけてきた。

このことはヨーロッパにもあてはまる。ヨーロッパの森林、原野を開墾して畑地や牧草地にする営みは、可成り長い世紀をかけたものである。多くの経験や処理の仕方、対応の問題がつねに農民の念頭を去らず、考えられてきた。今日に至るまでに農民が口伝えに語りつたえてきたものを「農民諺集」(Bauern Regeln)と呼んでいる。あるいは「農民判例集」(Bauern Weistümer)ともいっている。大体十六世紀頃まで農民の大部分は文字は読めなかった。大地を耕作したり、牧畜しているのが仕事で、読める必要もなかった。生活の方法、知識は大部分は口伝によって親から子へ、村落の共同体では年寄りから若者に伝えられた。その後宗教革命、農民戦争、三十年戦争など幾多の歴史を経過して書物の普及とともに文盲は少なくなってゆき、学校教育が国民全体の義務ともなる。農民の間で語り継がれた諺を書きとめ、集成する特志家が現われたし、各地方にそこに独特な諺とか、普遍的なものではあるが、少々変様したものとかが残っている。こうした諺あるいは自然暦をとおしてヨーロッパ文化の深い底部にあるものを探ろうとする試みが本稿である。これはあくまでも日本との比較においてその差異や共通性を明らかにしてゆくことが主眼である。ヨーロッパではシュウアーベン州とかチロル地方とかいった地方で独特の暦を持っていることがある。これは古い農民暦にもとづくものであるが、さらにそれよりも古い農事暦が基礎となっており、教会暦を農民の生活に適合させて作ったものである。とに角彼らの一年間をこれによって一瞥してみたい。

冬の始まり

まず一年の終りであり、冬の始まりを示す十一月十一日の聖マルチン祭の頃から諺を見てゆくと、すでに夏と秋の収穫を終え、クリスマスを迎える準備の季節であるためにひじょうにマルチンに托した諺、占いが多い。

マルチンに雪が降ると

白いクリスマスとなるだろう

マルチヌスが白い髯を生やしていれば

冬は長くきびしくなる

聖マルチンは古いしきたりどおり

白馬に乗ってやってくる

マルチン祭の頃は雪が降り出すことが多い。「白い髯」を生やしているとは、むろん雪のことである。「白馬」はマルチンの騎る馬の象徴であるがこれも雪である。マルチン聖者以前にはゲルマン信仰によれば、主神ヴォーダン（オーディン）が白馬に乗り、眷族をひき連れ、風と雪をまき散らして狩りをするといわれていた。これは厳しい冬を支配する神であり、雪の到来を告げるものであるが、これにたいしてマルチンは恵みをもたらす守護聖者とし

てやって来る。子供たちの聖者になってからは、城門や町や村のはずれに子供たちはマルチン迎えに提灯に火を点して出かける。冬を迎える節目としてまだまだ沢山の諺がある。

聖マルチンの頃どんより暗いと――

クリスマスには星がきらきら輝く。

マルチニの前に木の葉が落ちると

大いなる冬の寒さがやって来る

いづれも晩秋・初冬の季節の変化を示している。マルチン祭の頃は寒くどんよりした日がつづく。雪になることもあるが、曇（みぞれ）や霧をともし雨もある。大西洋に北風が吹きはじめ、一日一夜にして木の葉がほとんど舞い落ちるのも、冬の厳しさを予感させる。

聖マルチンはよい人だ――

われらに焼き鴛鳥を持って来てくれる

マルチニに豚を一頭屠れば

光のミサ頃まで食べられる

聖マルチン祭には張りぼての鶯うぐいす鳥をかついで行列に加わり、鶯鳥を食べる習慣がある。鶯鳥にかざらず、鴨や豚など肥えたものを屠ころって、冬を迎えるための体力をつける。「肥えた鶯鳥とワイン、聖マルチン万歳！」、「マルチニに肥えた豚を屠れば、葡萄酒の液は最高のワインになる！」その年の収穫した葡萄や家畜を味わう喜びの季節である。十一月は「屠殺の月」(Schlacht Monat)とも呼んでいる。同時に一年間の契約の地代、賃貸の決済の日でもあり、「マルチンの一週間は、大抵支払いの期日である」とか、「マルチンは地代支払いの日——、お金を革袋から取り出せ！」¹⁾ といって、生活上のけちめとして忘れてはならぬ諺で記憶させた。「マルチンがやってくると、農民は穀竿からざおをふり上げる」とあるように、農民たちが麦の脱穀をおこなうのは、マルチン祭あとの冬の作業となる。収穫の安緒と楽しさが季節感の中にもっている。

聖マルチンにはストーブに火を入れよ、

婢女よ、篩ふるい(ふるい)をかけよ！

聖マルチンは感謝の想いで

暖かいストーブのところに腰掛ける

秋から冬の準備をはじめ、薪を作ったりするが、ストーブの古い灰を取り除いて、煤を払い火がよく燃えるようにする。聖マルチン祭の頃には間違いないストーブに火を入れて暖をとるからである。寒いときにはストーブは感謝される。マルチン様をストーブを焚いて迎えるのである。このように聖マルチン祭は新しい冬を迎え、旧い夏の

季節の生活を改めるときである。

聖カタリーナの頃の天気は

一冬全体の天候となる

聖カタラインが

羊を家畜小屋に入れる

十一月二十五日は聖女カタリーナの日である。マルチン祭を終え、アドヴェントを迎える中間の時期で、この日も次の年の天気占いの日となっている。ある特定の聖者の日を定めて一年間、あるいは冬季全体の良否を判断しようとする。「カタラインは冬を中へはいらせる」というように、今まではテストのように雪を一寸降らせる冬も、いよいよこの頃から本格的になる。したがって出来るかぎり戸外や牧草地で遊ばせていた牛や羊も小屋に入れる。むろん聖マルチンの日に小屋に入れるところもある。

聖カタラインが

踊りを停止する！

聖女カタリーナは純潔の守護聖女であるので、若い娘によって祝われ、舞踏会に若者たちが招待される。この日

はこの年の最後の舞踊となり、やがて待降節^{アドヴェント}にはいる。「聖カタラインは車と踊りを止めさせる」ともいう。車は工作用の車や荷車の運転を指すこともあるが、娘たちが紡ぎ車で糸を紡ぐことをいう場合もある。十一月三十日は聖アンドレアスの日である。

アンドレアスが雪を降らせば

大麦小麦を嘆かせる

聖アンドレアスの日は占いの多い日である。恋占い、結婚の占い、次の年の幸運、不運の占いも行う。この日は元来太陽暦以前のグレゴリオ暦では恰も十二月の大晦日にあたるからである。この日が雪などで湿っぽい日か、晴れて乾燥した日かで豊凶を予想したので、農民にとって切実なものである。それゆえ、「アンドレアスの雪はしばしば百日の根雪となり、クローバーや大麦の嘆きとなる」という諺もある。

アンドレアスの夜に

天気がどんな顔をしているか、見つめなさい。

そのとき見えるがまますを信じてよい。

よい年か悪い年かそのとおりにやってくる。

アンドレアスの日の占いは、ここに叙べている程に真実なものと民間信仰で思われている。この日を過ぎれば、

いよいよクリスマスの十二月である。

十二月の嵐と雪――

農民は喜んで歩いてゆく

十二月が雪で寒ければ

それに応じた高さで麦が稔る

冬の厳しさや寒さを農民は喜び、雪の積る高さにとり入れの麦が積まれると見る。だから「もし十二月が冬らしくふるまわなければ、夏も良くはならない」とか、「十二月が暖かい、神よあわれみ給え！」という諺もあるように、雪でなくて雨が降りつづくとか、風と霧が多い不順がつづくと春に悪い影響がでてくることを気づかうのである。十二月に冬が来ず、ぐずぐずしていると、寒さが逆戻りして春が冬めいてしまい作物に悪いのである。「十二月に雷がある、つぎの年に風が吹くことが多い」。冬雷は沢山あるものではないが、風が烈しく吹くようになるともいっている。「待降節の厳しい寒さはその後十八週間（約四ヶ月半）冬がたつぷり支配することになる」ゆえ、覚悟をきめてかかれとも教えている。待降節の間にはいろいろな聖者の祭がある。十二月四日バルバラの日はこの聖女殉教を偲ぶ日となっているが、民間習俗の中に生きている。

バルバラの日に枝を剪りなさい

クリスマスまでに花が咲く

白い衣裳のバルバラは

よき夏の季節を告知する

「バルバラの枝」(Barbarazweige)と云つてこの日に桜桃、ビルネ(西洋梨)などの枝を剪り、水瓶などに挿してクリスマスを祝う部屋に置くと、二十五、六日頃花が咲く。花のつき具合でつぎの年の幸福を占う。「白い衣裳のバルバラ」とはいうまでもなく雪の降るきびしい冬をいい、夏の稔り多きを予想する。「クリスマスはバルバラの日のようになる」という諺は、この日がクリスマスの天候を予知すると考えるからである。

聖ニコラウスに雨が降れば、

天候は厳しく陰鬱になる

十二月六日は聖ニコラウスの日である。この聖者にはバルバラほど諺が多くないが、やはり雪を喜び、雨を良からぬものという判断がある。「聖ニコラウスが牛を贈って下さる、しかし手綱まではつけてはくれない」という諺もある。ニコラウスといえども、牛を調禦する手綱は自分で工夫しなければならぬ。

聖ルツツェンは日につっかい棒をしている

ルチャから聖夜までに

日は牝鶏の啼き声を大きくする

十二月十三日は聖女ルチャの日で、「ルツツェン」は民間で親しく呼び慣わしている表現である。グレゴリオ暦以前のユリウス暦ではこの日が冬至であった。「聖女ルチャはできる限り日を短かくしたいと願っている」という諺も同じである。日の短くなるのをや々と支えているという表現が、冬至の太陽の様子をよく表わしている。後の言葉はルチャの冬至を境いにして日脚がのびてゆくので雄鶏のときをつくる声も長くなる。農民らしく敏感にその変化をとらえている。聖女ルチャは「光」の意味を持っていることにも注目したい。「ルチャの日に凍れば、穀物の値が下り、この日が天気であれば、値上りする」という諺は、冬至の日は古くから占いの日でもあったことを物語る。

クリスマス・イヴが晴れて澄んでいれば、

翌年の穀倉は空っぽである

クリストメッテに木を倒す者は

その木で建てた家は十倍長持ちする

クリスマスの頃は連日連夜雪が降りつづく、たまに晴れ間があっても、まず暗澹とすることが多い。雪が多

いことを喜ぶ気持からいえば、晴れた空を見る方が凶作とみる。これと正反対に「クリスマス・イヴが明るく晴れていれば、よい年を意味する」という諺もある。雪はとに角としてせめてクリスマスは晴天で祝いたい気持もある。「クリストメッテ」はクリスマスの深夜のミサ、夜明けのミサを指す。かつてこの日に切った木は、祝福が多く、丈夫であるといつてわざわざ森にはいつてきり倒したといわれている。その名残りの諺である。

クリスマスが寒くて澄んでいれば
最高に祝福された年がやってくる

この諺についてはもはや言葉を挿しはさむ必要はない。「寒くて澄んでいる」のは、青空とはきまっていない。雪が止んでいる状態をも指す。キリスト教世界にとって最高最大の祭の日であるから、祝いの気持がこめられている。「クリスマスが晴れていれば、よいワインの稔り年」、「雪のクリスマス、クローバーの復活祭」も同じである。もしも「クリスマスが緑であれば、復活祭の卵に雪がふる」という諺もあるように、かえってクリスマスの頃の暖かさは正常ではない。「幼児キリストが寒さと雪をもつてくると、冬の貯蔵の穀物を上へ挿し上げる」というごとく、クリスマスの寒さと雪が豊作を約束する。

聖なるキリストが柔和であれば
冬はそのために荒れ狂う

クリスマスの日々にふく多くの風は
ゆたかな実を樹々につける

クリスマスの頃一時的に平穏な日々がつづくことがある。しかしそのあと雪と風が荒れ狂うことが多い。この頃劇しく吹き荒れて果樹が枝と枝を打ち合せるのを見て、よい実をつけるといって農家は喜ぶ。「クリスマス——風が吹き、嵐となり、雪が降ればそれは正しい時節——である」という言葉が総括的な意味をもつ。「クリスマス迄大はしゃぎすると、そのあと大きな嘆き」。これは無鉄砲な騒ぎをして、あとで二日酔いやら身体の調子をくずしたり、蓄えが乏しくなったりする戒めである。かくて大晦日の夜を迎える。クリスマスと同じように花火をあげたり、射撃をして古い年を送る村もあれば、教会の塔の上で楽隊が「清しこの夜」あるいは「螢の光」を奏したりする。一年最後の夜となるので、アンドレアスその他と同じようにさまざまな占いが行われる。とくにすぐはじまる新年の予想が多い。

シルヴェスター (Silvester) が明るく晴れていれば、

新年はまず目出度し！

シルヴェスターの夜、風が吹き、朝の太陽がのぼれば——
ワインと麦に希望がある

大晦日の夜 (Silvesterabend) だけは、教皇シルヴェストスの名を附けている。最後の夜に風が吹き、朝の太陽が昇るのは、冬の季節にある体験であって、きわめて自然で特別のものではない。それゆえに豊作に希望がもてる。大晦日だから特別の天候というわけではないが、人間の心が新たに期待するものがあるからである。「どのような天候になろうとも、一年の最後の結末に手をひろげよ!」。とに角無事終えた一年への感謝と訣別の思いを込めて手を広げ、抱擁しようという意味である。新年一月一日が訪れる。この日も年頭であるために、一年の天気占が多い。

新年晴れで澄んでいれば
豊年である

「新年が太陽の光で輝やいといると、おそらく一年は稔り豊かとなるであろう」、
「新年の夜が静かであれば、よい年となる」等々も同じである。その反対に朝焼けだったり、雨が降ったりすると喜ばれない。一月六日は「三王礼拝」(Dreikönig) とか「星の子供」(Sternsingen) とかい、ベツレヘムに幼児キリストを礼拝すべく訪れる東方の三賢王を祝う日である。クリスマスは十二月二十五日に祝う以前は、元来この一月六日にクリスマスを行っていた。一月一日を天地創造のはじめとすれば、一月六日がアダム、イヴの創造で、キリストは新しいアダムとしてこの日を誕生日として祝っていた。今日では三王礼拝あるいは「公頭節」(Epiphania) といってやはり重要な祭の一つであるため、占いも多い。

三王礼拝までに天氣がどのようなものであるか、それによってつぎの年が決まる。

クリスマスや一月一日と同じようにこの日が「晴れて澄んでいれば、この年は多くのワインがとれる」といった諺もある。

三王礼拝の頃日脚が延び

仔鹿がもつと跳ぶようになる

十二月十三日の聖女ルチャの日には牝鶏の鳴き声に注目していたが、日脚はのびて仔鹿が跳ぶほどに感じられる。このような諺にも春への待望の心持がうかがわれよう。「三王礼拝に雨ならば、芽は二倍となるが、穀倉には半分しか稔りがない」ともいい、この頃の暖冬を氣遣う。

ここで一月全体に関する諺を取り上げてみることにしたい。

一月に高く雪がつもると、

夏にはクローバーが高く茂る

一月の流れは小さいが、

秋にはよいワインができる

雪の積り具合とクローバーの茂り具合を対照させているのは、十二月にもあった類似の諺が思い浮べられる。「一月の流れが小さい」とは雪に川の流れも埋まり、凍りついている冬の厳しさを指している。その他「一月に氷と雪がぎしぎし鳴れば、たつぷり麦とクローバーの収穫がある」なども同じ内容を指している。「一月に蚊が踊れば、飼料とバターは貴重になる」。暖冬で蚊やガガンボの発生はやはり凶年のしるしで、クローバーやバターはとれなくなる。

一月に猫が日向ぼっこすれば

二月にはストーブのそばに寝そべる

農民の諺で珍らしく猫が登場する。一月暖かければ、二月には寒さが戻ってくることを警戒したものである。「大地はそのベットにシーツを持たねばならぬ、大地も冬のまどろみを楽しむべきである」という諺は、雪と氷に埋もれて大地が眠ることを善しとみる。寒さで野鼠が死に、害虫も乏しくなり、水分をたつぷり吸った土壌は肥え、耕作に良いといわれている。

ファビアン・セバスチアンは

樹木が樹液を出すはじまり

一月二十日は聖ファビアン、聖セバスチアンの日である。秋以来停止していった樹液が再びこの頃から動き出す

といわれる。「ファビアン・セバスチアンには、樹木と日脚が成長をはじめ」という言葉もあり、翌二十一日のアグネス、二十二日の聖フィンツェンツの日にも「アグネスと聖フィンツェンツがやって来ると、樹木に新しい樹液が流れるようになる」という類似の諺がある。この頃から伐採搬出が行われる。木こりが木をきり倒した経験から定着したのであろう。

聖パウロが上天気なら

百姓に麦とワインをもってきてくれる

パウリの回心――、

驚鳥よ、卵をこっちへよこせ！

一月二十五日は丁度冬の半分にあたり、後半の冬は春へと一歩々々近づいてゆく。これをパウロの回心 (Pauli Bekehrung) と結びついたところに民間習俗と教会暦の融合の面白さがある。この頃になると、長い陰鬱な雪雲も途切れて晴れることがある。パウロ回心の日は春に近付くだけに、農作への天気占いは一層真剣になる。驚鳥が生む卵の数も増えてくる。「パウリの回心――、車があちこちすべり出す！」、「パウリの回心で、コウノトリが再び帰ってくる」なども同じである。つぎのような天気占いは、典型的なものである。「聖パウロの日が晴れていれば、良い年。パウロの日が風が吹いていれば、草はのびなやむ。霧がひどければ、棺が一杯になる。雨つづきなら、穀物は高くなるう」。霧は病人をふやすといって、一般に喜ばれないし、湿り気が多過ぎて不作になりやすい。

二月は風の月といい、風が吹き荒れ、やや寒さがゆるんで、雨の日も多くなる。それでもやはり「寒い二月、よ

い麦の年」といって寒い方が喜ばれる。だから「ひばりが二月に明るく歌えば、農夫は打ちのめされる」ことになる。二月の暖かさは禁物である。

二月に風が角笛の中に吹き込めば、

夏には麦の中に風が吹く

農夫いわく、

二月は不意を襲う無法者だ。

二月は「角笛の月」(Hornung)ともいう。羊飼いが角笛を吹くように風が吹くからである。「二月には嵐が吹かなければならぬ。牡牛の角がゆらぐほど」という諺もある位である。思いがけぬ突風や雪解けがあるかと思うと、雪がまた積ったりする。「二月はかわった奴だ、凍らなかつたら、雪が融ける」は二月の気まぐれをいい得ている。つぎのような冗談めいた諺もある。「もしあなたがいつでもあてにしたいなら、二月三十日はけっして雪が降らない」。また「閏年、寒い年」という諺もある。こうした言葉が残っているのも、長い間の経験によるものであろう。二月二日は「マリヤの光のミサ」である。この日家で冬の間点した古い蠟燭などを教会に持ってゆき、新しい蠟燭に火を点して家に帰る。日本の節分が二月四日であるように、春を迎える節目となっている。この日仕事を休み、御馳走をふるまう。

光のミサには、

昼には御馳走を召し上れ！

雪の中で蠟燭を潔めれば、

クローバーの中で棕櫚棒を潔める

光のミサに朝出掛け、昼は親しい人や親戚を招いて御馳走をたべる。「光のミサの日が過ぎれば、冬の半分がようやく過ぎ去る」という言葉もあり、日脚がのび、少くとも蠟燭での冬の生活を終え、春（夏）の生活にはいる日でもある。大抵雪の日が多く、それがまた順調な気象でもあり、やがて見事なクローバーの萌え出た中で復活祭にはいり、「棕櫚の日曜日」(Palmsonntag)をお祝いできる。

マリヤの光のミサに太陽がかがやけば、――

狐は再び穴にかえってゆく

光のミサに太陽がかがやくよりは

狼が家畜小屋を襲う方がまだましだ

あまりに上天気になると、その反動の方がこわく、思慮深い狐は再び厳しい寒さが来ると思って穴に潜り込む。

狼が家畜を襲う方が凶作になるよりましだというのはいかにも農民らしい見方である。二月六日は聖女ドロテアの日である。

ドロテアがたくさん雪を運んでくれると

夏にはよいクローバーを持ってきてくれる

光のミサを過ぎてから、また雪が沢山降る。農夫はこれを喜ぶのである。二月十四日はヴァレンティンの日である。「ヴァレンティンの頃雪が降れば、復活祭には若い枝に花が咲く」、「寒いヴァレンティン——早い春の始まり」ともいう。やがて二十二日になると「ペトリ・シュートル・ファイア」の日が来る。これはさきにあげた「パウロの回心」、「マリヤの光のミサ」にならぶ節目である。教会暦ではペテロが教皇座に就いて第一代目の教皇となった祝いであつたが、現在は民間習俗として子供の春を迎える行事のみが残っている。

ペテロ教皇座の日が凍っていれば

まだ四十回以上凍る

聖ペテロが春を動かしはじめ

聖ウルバンが春を終らせる

二月下旬頃寒ければ冬は当分つづくというのが予想である。反対にペテロの日が凍っても、それが春の始まりだという見方もある。聖ウルバンは四月二十五日でワインの守護聖者として崇拜されている。農民暦ではこの日を以て春の終り、夏の始めと見るようである。

マタイスは

氷を破る

彼は他に何もしないが

この一つだけはやる

聖マタイアスは図像では手に斧を持っている。イスカリオテのユダのあとに使徒の一人に選ばれ、のちエチオピアに伝道したと伝える。天気占いでは春の希望を押える役目をしているともいう。この季節には一度暖くなっても、またきびしい寒さがぶり返すことがあるからである。「マタイアスの日以後、狐はもう氷の上を渡らない」という諺は、さきに挙げた光のミサに穴に再びかえる狐と比較すると興味深い。しかし「わたしはマタイアスが好きだ——樹木に新芽をつけるから」という諺もある。

ファスナハトの頃太陽が照れば

麦と豆はよいはずだ

ファスナハトがよい天気なら
犁を用意して早くすけ！

謝肉祭（ファスナハト、カーニヴァル）は復活祭の移動祝日に応じて変るので、一定の日付けで表現できないが、大体二月の終りかおそければ三月になることもある。春の前祝いの祭である。もう畑を犁で耕してよい時期で、「ファスナハトの夜に星が多ければ、牝鶏はよろこんで卵を生む」というように春の萌しは強い。ファスナハトの祭は木曜日からはじまり「灰の水曜日」で終ることになっている。

春（三月）

乾いた三月は

農民の心を喜ばせる

三月があまり乾きすぎず、あまり湿りすぎるようなことがなれば、

農家の穀倉と甕はゆたかである

三月にはいると、農事に関する諺が急激に増えてくる。ここに掲げた三月の気象については今までとちがいが具体的にとなっている。三月は雪解けがはじまり、河川は氾濫することが多い。どうしても湿気の多い天気となる。「三月が荒々しく角笛を吹けば、よい乾し草と麦ができる」とか、「三月の雷がとどろけば、小麦がよくできる」とか、

風や雷は歓迎されているのにたいし、「多くの霧と雨は危機」と警戒している。

三月の雪は心配いらない

その下には温かい心が脈打っている

三月野外で花を見たら

おそれずに種子を蒔いてよい

三月の雪の性質をよく掴んでいる。後の諺はかなり古くからいい伝えて来たもののようである。「アムゼルが季節どうりだ——、農夫よ、喜びなされ」。これも素朴な諺である。人間は野の花や鳥を見て、季節を確かめ、自己の感覚を補った。三月は冬から春への転換期であるから、双方の特徴を持っている。「三月の埃り、四月の若葉、五月の笑いは良いものだ」、「三月の風、四月の雨は五月に大いなる祝福をもたらす」、これらは同じ内容の異った表現である。「三月にはつねに四月がつづく。これが暦の心である」などは、生々発展する春の秩序をよく読みとった諺である。

グレゴリイの日が来ると

農夫は種子をもって畑に出なければならぬ

ゲルトラウトは敬虔な意味で

野菜作りの最初の娘だ

グレゴリイは聖グレゴリオの訛りである。聖グレゴリオの日は十二日であるが、かつてユリウス暦では丁度春の始まり(春分)の三月二十二日にあたり、この日をもって農耕を始める大切な日となっていた。「グレゴールが大地に火を放つ」ともいい、下部オーストリアでは家畜を牧草地に放つ日になっている。聖女ゲルトルト(Gertrud)の日は十七日で畑を耕したり、種子を蒔き、苗を植える目標の日となっている。昔は女性が畑仕事を始める日でもあり、グレゴリイとならんで野菜作りの目安となっている。このように農民は聖者の日でもって自分たちの仕事を覚え、聖者を擬人化して自分たちの仕事と結びつけて覚える。「ゲルトラウトが上天気なら、菜園家は大喜び」、「聖ゲルトラウトは、牛を草のところへ連れてゆき、馬に犁をひかせ、蜜蜂を飛び立たせる」といった諺も生きている。十九日は聖ヨゼフの日である。ヨゼフは聖母の夫、キリストの父で、一般に農耕の守護聖者となっている。「ヨゼフの日が晴れていれば、豊作の年」、「ヨゼフの日が澄んでいれば、よい蜂蜜のとれる年」といった諺がある。

大麦、豆、玉葱をよく実らせたかったら、

聖ベネディクトに蒔くとよい

ベネディクト派修道院の創始者聖ベネディクトは祈りと仕事の一致を唱え、農耕を奨励した。祭りの日は二十一日である。大修院モンテ・カシノはヨーロッパの修道院の中心、文化の揺籃でもある。

三月二十五日はマリヤの受胎告知 (Maria Verkündigung) である。古代ローマの春の始まり、新年にあたる。ここにマリヤの受胎告知を祝う日としたが、キリスト教では古い祭の一つである。

マリエンがよい天気ならば

その年は稔り豊かな年である

マリヤが告知されると

コウノトリやツバメも故郷へ戻ってくる

「受胎告知の美しい朝は、農夫をいろいろな心配から解放する」という諺もある。この日は祝福の日、同時に農耕の良否を占う重要な日である。冬のはじめ頃からあれこれ心配してきたことも、この受胎告知で一ぺんに解消するわけである。「マリヤの日に亜麻を蒔けば、あとに霜があってもかまわない」という諺は、受胎告知後の春の確かさである。燕を手をしている幼児をマリヤが抱いている図像はこの春の告知を示すものである。「マリヤ受胎告知には、タゲリ (Kieditz) が巢で卵を抱く」という諺もある。女性は蠟燭を消して夜なべ仕事をしなくなる。つづいて二十七日はルペルト (Rupert) の日で、「ルペルトスには、毛虫の駆除をしなければならぬ」。春とともにそろそろ発生する毛虫の幼虫の駆除を早くするようにと村に口承の諺がのこっている。

四月

三月がしようとしないうことを

四月はあえて行う

四月にすももが早く咲けば咲くほど

収穫はヤコービィの日より早くなる

四月も三月とならんで、農事に精を出すときであるので沢山の諺がある。四月は変化しやすい。「四月の天気と女性の心は、そもそも変りやすい」、「四月の天気とトランプの運は、その時その時でかわる」といった類いの諺が多い。しかし、「四月に蝶が舞っているのをみたら、安心して庭で苗を植えてよい」。「四月に燕が巣をつくれれば、多くの飼料、牝牛、仔牛ができる」ともいって、安定感をもって農事に励むことができる。すもも、やぶすももなどの花の遅速や多少で豊凶の判断にしている。「四月は自分がしたいと思うことをやる」ともいう。風を気ままに吹かせたり、雨を降らせたり、急に暑くなったりするかと思うと、雪を降らせることもある。

たとえ四月が調子よくいっていても

農夫の帽子に雨を降らせることがある

四月の小雪は五月の鈴蘭を運んでくる

緑の菜園を白くまぶして雪が降ったり、農夫の帽子に少々積らせてもすぐ消えてしまう。むしろおそろしいのは霜の方である。五月に咲く鈴蘭の白い花を四月の小雪の名残りに見立てた感覚の冴えは文学的でもある。

主のめぐみと四月の天気

女性の讚美と薔薇の花

結び目とさいの目は

信ずる者の方に向いてゆく

このような譬えの中に組み込まれているのも四月の気象の面白いところかもしれない。「四月一日に種子をまけば、百姓を根こそぎ駄目にする」。四月一日は四月の冗談、四月馬鹿で知られているが、元来物忌み、慎しみの日であったし、イスカリオテのユダの誕生日ともいい慣わして災いの日としている。「四月の嵐と雨の重みは、ワインと黄金の果実を告げる」の諺は農耕の重みである。

ティブリティウスが歌とラップでやってくると、

郭公やナハティガルもやって来る

聖ゲオルギが馬でやってくる

よい春が天からやって来る

ゲオルギに牛を放牧し

ミヒヤエルに再び家に戻す

四月十四日は殉教聖者ティブルティウス (Tiburtius) の日である。四月半ばになるとこの聖者の祭の歌とラッパがきこえる。それにあわせるかのように、南から郭公やナハティガル (さよなきどり) が帰ってきて歌い出す。四月二十三日は竜退治で有名な殉教聖者ゲオルク (Georg) の日である。ゲオルクは甲冑をつけ、槍で闘う中世の騎士の典型として、また信仰を守る者として崇拜された。彼にちなみ、町や村の主だった人々が馬に乗って見廻りの行列行進を行う。ヨーロッパも緯度が高くなるにつれて、春の訪れがおくれ、丁度このゲオルクの頃、春めいてくるので、一つの節目の日として盛大に祭がおこなわれる。この日に畜舎で冬を過した牛や羊を放牧するところもあり、他方では麦が生長し、「聖ゲオルグンの日に麦が高くのびて鴉がその中にかくれる位であれば、農夫よ、喜べ! 間違はなく稔りの年である」という農事の諺もある。「ゲオルギの日の葡萄の取り木は、あとで沢山の房となる」といった葡萄園の剪定の日ともなっており、麻の種子を蒔くのもこの頃である。「聖ゲオルクが昔ながらにやってくる。馬に乗ってやってくる」のは、村の生活の変らぬ春の保証でもあらう。

聖ペテロがよい天気であれば

キャベツや豆を蒔いてよい

このペテロは、一二〇五年ヴェローナ生れのドミニコ派の殉教聖者ペテロスのことである。「聖ペテロの祭にはこうのとりが巢を探す」といわれているのは、二月二十三日の教皇座ペテロではないが、混同していることもある。農民はすべて聖者を農事と結びつけて記憶している。

五月

さわやかな五月は

さまざまなものをもたらす

五月が五月をはじめてもたらすときは

五月が五月を見出すときよりずっとすばらしい

長い冬の桎梏から完全に解放されるのは五月である。五月は手放して謳歌され、喜ばれる。農事はどんどんはかどり、もっとも楽しい季節である。「さわやかな五月」(Kühler Mai)の言葉は独特の情感がこもり、「さまざまなもの」(Allerlei)をもたらすということにも万感の想いがある。「五月の夕方の露とさわやかさは、ワインと多くの干し草をもたらす」、「畑と牧場は緑に飾られ、天から五月の露がおりる」、「五月の風が吹いていることは、農民の願いである」、「五月の雷雨、農夫は万才^{ユツペ}を歌う」、「五月に蜜蜂がさわがしく唸れば、農夫は喜びにはしゃぐ」。

このような諺が沢山生れている。「五月の雨は繁栄と干し草をもたらす」といい、適度の雨は喜ばれる。「本当の五月はいつも、一年間の鍵である」といえる。だから五月がはじめてやって来てめぐり逢えた喜びは、季節が過ぎてその去ってゆく後姿の五月を見るよりははるかに大きいのである。五月柱を立ててそのまわりで踊り、白樺や樅の若枝を窓に飾って若い娘を祝福するのもこの季節ならであらう。

しかし手離しで喜んでばかりいられない。「喜びの月に選ばれた五月は、見かけによらず霜をかくしている」こともあり、「五月の霜はワイン、ホップ、樹木、穀物、麻を痛めつける」からである。「五月がひどく冷く湿つければ、コガネムシも冗談をいっていられない」のである。

復活祭に準じて移動祝日のキリスト昇天祭や聖霊降臨祭がつづく。「昇天祭の天気がどんなであるかによって、秋の天候が決まる」とか、「来れ、聖霊よとわれわれが歌うとき、穀物はそれにもふさわしくなる」などの諺がある。天候気象に運命を預ける農耕では、天から聖霊が降ることく、光と熱と雨と風などの自然の恵みを願うのである。「聖霊降臨祭には農夫はもっとも少くなる」とは、村ではほぼ種子時きを終え、穀物、野菜の花のつき具合や結実をひたすら祈るからである。

「昔から農天は毛皮を昇天祭に脱ぎ、ヨハネ祭の頃、再びつける」。ヨーロッパ中部、北部では、冷い日もあり、毛皮の外套を脱ぐのは、キリスト昇天祭の頃だともいう。ヨハネ祭頃から夕立が多くなるので再び着ることが多い意味である。五月四日は聖フロリアン (St. Florian) の日である。「フロリアンよ、フロリアンよ、まだ雪の帽子をつけてもよい」という諺は、山間部などでは稀れに小雪が降ることもあり、羊の頭や籬に降って思いがけぬ五月に出逢うからである。しかし七日のスタニスラウス (St. Stanislaus) の日には今年植え付けた新じやがいもが出

る。「聖スタニスラウスが近付くと、じゃがいもがころがり出る」。

農夫たちがもつとも懼れるのは、新芽を出したり、花が開いたりするこの五月に霜がおりることである。五月十二日の聖パンクラティウス (St. Pancratius) 、十三日の聖セルヴァティウス (St. Servatus) 、十四日のボニファティウス (St. Bonifatius) の三聖者を「氷の聖者」(Eisheiligen) と呼んで心をひかっている。

パンクラーツ、セルヴァーツ、ボニファーツは

好きなところに霜や氷をつくり出す

三人のティウス殿はきつい御仁じゃ

園芸家、葡萄園主を怒らせる

「パンクラティウスは頸を曲げ、彼の鎧は霜でカチカチ鳴る」という表象までしている。「三人のティウス」とは、三聖者の語尾がそれで終るからである。農民たちの氷の聖者は三人だけでなく、十一日のマルメトス (Mar-metus) 、十五日のゾフィー (Sophie) まで加えて警戒している。ゾフィーは聖女である。これらの聖者達、聖女が別に氷や霜を持ってくるわけではなく、たまたま聖女のその日に起るに過ぎないが、農民はこのような表象表現で「五月の霜」をおそれるのである。「パンクラーツが上天気ならば、よいワインに御目にかかれる」と安堵もするし、「セルヴァーツの前に夏はなく、セルヴァーツの後に霜はない」ともいって一安心し、「氷の聖者が霜もなくて通り過ぎれば、農夫と葡萄園主はユッヘイを歌う」のである。日本でも立春から数え八十八日回にあたる五月二日

頃を「八十八夜の別れ霜」と呼び、これからのちには霜害はないといつてさまざまな野菜の種子や苗を植えるのと似通っている。

聖ウルバンが晴れて上天気なら

穀物とワインは一杯だ

おお無骨者のウルバン様よ

せめて正気はお持ち下され！

五月二十五日は聖ウルバン (St. Urban) の祭の日である。ウルバンは葡萄、ワインの守護聖者となっているため、各地で盛大な祭がおこなわれており、大切な天気占いの日となっている。この頃葡萄が開花するので、雨にも神経質になる。「ウルバン様、太陽を輝やかせて下され、それによってワイン作りが泣くことのないように」、
「太陽が今かがやかしく照っている、聖ウルバンはそれを善しと思った」。この最後の諺は創世紀の天地創造の叙述をかりたものである。とに角ウルバンが正気でなければ、大変なことになると気をつかっている。この頃から五月の雨や露で育ったクローバー刈りもはじまる。農民にとって最後の収穫をあげるまでは、気になることがずつとつづく。その一つ一つの段階を経て夏に向う。「セルヴァティウスを無事通り越せば、あとはウルバンが一休み与えてくれる」のである。

六月

六月が冷たく湿っぽければ

穀倉、台所、ワインの甕は空になる

六月が温かで湿っていれば

多くの穀物、さらに牧草ができる

花が咲くとき暗い太陽！

愛する神よ、穀物を守り給え

六月は薔薇の月 (Rosenmonat) といって薔薇が到るところで咲く。日本も梅雨にはいる季節であるが、ヨーロッパも湿润である。ただし冷く湿润か、温かく湿润かで農作物がちがってくる。前の二つの諺はその違いを表わす。「暗い太陽」は雨つづきで日射しが弱いことを意味する。雷雨があれば、穀物を肥やすものとして喜ばれる。「螢が光るとき大鎌を用意しなさい」といわれているように螢の発生は豊饒のしるしである。「六月の北風」は雷雨をとまなうことが多い。「六月が雷の角笛を吹けば、大地に良き穀物を吹き込む」ともいう。「蝙蝠が夕方あちこち飛べば、長つづきの好天気となる」。螢と同じように蝙蝠もよい天気を示す動物となっている。

御聖体が晴れて上天気ならば

良い年となる

バルナバスは大鎌でもって

一番長い牧草を刈りとり

聖体拝受(Fronleichnam)の祭は、聖霊降臨祭後の木曜となっているのでやはり移動祝日として六月の中旬か下旬頃行われる。穀物、野菜、果物、家畜一切の豊饒を祈り、キリストへの感謝を表わすこの祭は華麗で長閑な行列を作って町や村を練って歩く。当然天気占いがおこなわれる。雨などが降ると教会内のミサだけで済すことが多い。六月十一日はバルナバの日で農村ではこの頃牧草刈りを始める日として農民は記憶している。

聖フィトスに葡萄の花が散れば

良いワインをその年もたらす

聖フィトスが強い雨をもってくると

測り知れない祝福をもたらす

六月十五日は聖ファイト(Veit, フィトス Vitus)の日である。十四救難聖者の一人で民間信仰では雷と火災、

菜局、葡萄園等の守護聖者となっている。

かつては聖ヨハネが夏至の日の聖者として崇められる前に、聖フィトスがその役割を務めていたので、「聖フィトはもつとも長い日を、聖ルチャはもつとも長い夜」とか、「聖フィトは季節をかえる」とかいふ諺は以前の役目をそのまま残したものである。農耕ではこの日を重んじ、天気占いが盛んに行われる。「聖フィトの後は、蠅の季節」といい、いよいよ夏の暑さを予想させる。「聖フィトは鴉麦をふるわせる、雨模様を持ってくる」も程度によっては雨が喜ばれるが、時には雨が作物を害うものとして敬遠されるのである。

聖ヨハネに

最初の草刈人が仕事にかかる

聖ヨハネの日より前には

大麦を賞める人はいない

六月二十四日はバプテスマのヨハネの誕生を祝う。この日は十二月二十五日がキリストの誕生を祝うのに照応しており、夏至と冬至にあたる。この頃になると牧草地の干し草刈りが盛んになる。麻の種子蒔き、夏の野菜の苗植えその他とならぶ大切な仕事である。このヨハネの日を過ぎて麦も熟れてゆくので、それ以前では良否は決めかねる。「ヨハネの日がどんな天気具合かによって、あとの四十日の気候がきまる」というように、このヨハネ（夏至）は大切な天気占いの日である。「ヨハネが生れると、長い日はなくなってゆく」、「聖ヨハネから太陽は冬の方へ向

う」などは、この日が夏至であることを忘れさせぬ諺である。ヨハネの夜、大きな火を焚いて若い男女が歌い踊る。「ヨハネの日に初実りの桜桃を家へもってゆく」、「聖ヨハネの日が過ぎて、農夫は大麦を賞めることができる」なども人口に膾炙している諺である。

ペーターとパウルが

麦の根を弛ませる

十四日ののちには

車に乗せねばならぬ

六月二十九日はペテロ・パウロの日である。銀の穂波を波打った麦も根が弛み刈り入れの時期が間近かとなる。この日が晴れているとよい年というきわめて具体的な占いもある。「ペーター・パウルは山へ登る人や水で泳ぐ人を望まない」と山登り、水泳などをきびしく戒めている。

七月

七月の太陽が金色に輝やけば

小麦は金色の粉になる

あなたが七月に一日なおざりにしたことを

八月の十日で取戻すことはできない

大きな雷鳴をともなう七月の夕立は

ゆたかな穀物をもたらす

七月の太陽が燦々と輝き灼けるような熱さが喜ばれる。「九月によいできとなるものは、七月の暑さに灼けるのがよい」とされる。また夕立も適度な湿りを与えるので喜ばれる。「七月に熊手をつかわず、麦刈りに手足を動かさぬ人、秋に早起させぬ人は冬にどのようになっているかで分る」。古くから伝わるこの諺はイソップ寓話から由来するものか、教訓をも含んでいる。「七月に蟻が大きな塚をつくれれば、きびしい冬がやって来る」、「七月にアトリの囀ずりが朝早ければ、何度か雨に見舞われる」、「蜘蛛が熱心に戸外で網をつくれれば、よい天気の上らせ」等々の諺は天候、気象を昆虫や鳥の生態からの観察しているのは、日本はむろんのこと世界の農民生活と共通するものがある。

聖キリアン、この聖者は

最初の干し草刈りをやってみせる

聖マルガレーテは初実りの西洋梨(Birne)を摘みとる

その上到るところで収穫がはじまる

聖キリアンの祭は七月八日である。アイルランドから伝道に来て、ヴェルツブルクで殉教した。この聖者の祭を目標に干し草刈りがはじまる。麦刈り、葡萄摘みなどは特定の聖者の日から行うことを定めている。七月二十日は聖女マルガレーテの日である。彼女も信仰のため斬首殉教した。しかしこの聖女の日を農民は西洋梨の初摘みの日、その他の野の収穫の目安にしている。

マグダレーナは主を悲しんで泣くので

この日は雨になりがちだ

聖ヤコービイの日が晴れていれば

多くの稔りが約束される

七月二十二日はマグダラのマリヤの祭の日である。キリストの死を悲しむマグダレーナの姿をこの日に降る雨から連想する。七月二十五日は大ヤコブ (Jakobus der Ältere) の祭の日である。この日を目標において麦刈りを行うので、天気占いやクリスマスまでの予想を立てる諺がとくに多い。「ヤコービイの頃晴れて暖かければクリスマスは腹わたまで凍える」などはその一つである。「ヤコービイの羊雲——、冬に沢山雪を降らす」。羊雲から寒い雪を連想する。ヤコブの日に刈り入れをするために多くの傭人を頼んで御馳走をする。とりたてのじゃがいも、胡瓜など主人と傭人は自然の恵み、人間同士の協力を互いに感じ合うので、「ヤコービイのじゃがいもと胡瓜のサラダ、——主人と傭人はびったりつながる」という諺もある。

ヤコープはすべて労苦を取り除き

じゃがいもと新鮮なパンをもってくる

聖ヤコープは麦粉を

捏槽こねおけの中でふるわせる

麦を刈り、じゃがいもを掘り上げたりしたとき、長い間さまざまな労苦、心配が消えてゆく想いがする。「ヤコープが暑ければ、その労苦と汗は酬いられる」も同じである。新しく碾いた麦粉でパンを造る。捏槽の中でふるえている塊は、農民の喜びを率直に表現している。「ヤコープがその土地に来れば、まもなくコウノトリは飛び立つてゆく」。麦刈りとともに、春から渡って来て巣をつくり、ひなを育てたコウノトリは早くも南へ帰ってゆく。鳥の去来が季節を示す。

聖アンナが先づ通り過ぎると

さわやかな朝がやってくる

ヤコブにつづいて二十六日は聖アンナの祭の日である。聖母マリヤの母アンナと父ヨアキムはキリストの祖父母であり、聖家族崇拜が中世末にさかんとした。とくに聖アンナを祀る教会では盛大な祭を行う。アンナ像を教会から町や村の広場に安置し、あるいは美しい行列行進をする。やはり収穫への最後の祈願をこめたものであろ

う。「ヤコーブとアンナのあとで、葡萄の房が垂れる」というように、麦刈りのあとでは葡萄の収穫が無事終えたと満点の一年になる。しかしそれはまだ二、三ヶ月先きのことである。

犬の日が注ぐものは

葡萄の房を満足させるにちがいない

「犬の日」(Hundstage)は七月二十三日から八月二十四日である。シリウス星の出現によってこの名があり、もっとも暑い夏の季節である。「七月の半ば太陽は獅子座にはいる——、ひどい暑さが間もなくやって来る」のであるが、そのお蔭で葡萄も成熟するし、汗を流して刈り入れに精出し、酬いも大きい。「犬の日が明るく澄んでいれば、よい年であることを示す」という諺は暑い夏の讃歌である。

八月

八月が暑ければ——

農夫の喜び

霧は八月にそれほど必要ではないが
それぞれ日々のパンとなる

八月につよい風雨があると

ワインも果実もできなくなる

八月は「刈り入れの月」(Ernting, Ernte-Monat)とも呼ばれている。「八月が熟し、九月が手にする」も同じで暑くなければ、ものは実らない。「八月にたくさんのハナムグリがでていたら、主婦はワインを水で割る必要はない」ともいう。ワインの豊作を意味する。一般に「霧の多い年は稔りのよい年」といわれている。刈り入れ前の畑にかかる霧を見て「パンとなる」ものとも観るのである。八月から九月にかけて、刈り取ったあと麦束などを焼く煙が立ち昇るのも一つの風物である。森や沼地を火を入れて焼払う煙を「煙霧」(Heauch)といい、青く横にたなびくことがある。「八月の煙霧、きびしい冬がつづく」はこのことを指すか。「葡萄と山羊にとっては八月もひじょうに暑くてたまらないということにはならぬ」葡萄の実にとって暑すぎて困ることはない、山羊も暑さに平気である。日本のような颱風のおそれはない代りに時々劇しい嵐が襲う。これは果実にとって致命的である。反対に昨年(一九八三年)の夏のごときは百年来の早魃で畑地や牧草地が地割れしており、林檎や洋梨が茶色に腐ってぼたぼた落ちることもある。むろん教会では雨乞いの祈願が行われていた。

雷は八月にとって欠点ではない

大気や大地に必要なのである

電光雷鳴は原始から人間がもっともおそれたもので、現代でもかわりはない。しかし農耕生活の中でやはり大気

や大地に必要なものであるという分別ある諺もこのように生れている。「多くの夕立は稔り多い年をつくる」とか、とくに「おそい雷雨は沢山の穀物をつくり出す力をもつ」といった言葉は農民の長い経験からの知恵であるかもしれない。

ペトルスからラウレンティウスまでが暑いと

冬は長く雪と氷におおわれる

八月一日は「ペトリ鎖につながれた日」(Petri Kettenfeier)の祭があり、ケルン近郊では火を焚いて行列行進し、跳びはね踊る習俗がある。ペテロがローマ官憲にとらわれ、鎖につながれ牢獄に投ぜられた日で、四月一日と同じように物忌みの日となっていて、木のぼり、水浴びなどを禁じている。盛夏中の盛夏としてこの頃から逆に冬のきびしさを予想する諺となる。「ペトリの鎖の日に猟師は理由があるか、理由なしかとに角犬をなぐりつける」という諺もある。暑くてやりきれない、いまいまいしい日の意味である。四日(ドミニクス)、五日(オズヴァルト)の頃これらの聖者が「人蔘蕪がすくすく太らせる」といって喜ぶ。

ラウレンティウスの日から

畑を耕さなければならぬ

ロレンツ過ぎると

樹木はもはや生長しない

八月十日は聖ラウレンティウス（ロレンツ）の日である。この殉教聖者は火災、料理、赤いあざなどの病気の守護聖者であるが、葡萄栽培、ワイン製造に関するパトロンでもある。この日を最初の秋の日とする地方があり、他方最後の夏の日照りを受ける日と考えるところもある。ところによっては麦刈りを終えて、すぐ畑を耕やし、土の中に太陽を入れる。「ロレンツに日照りなら——、秋は祝福されるだろう」といった天気占いもある。樹木の生長もこの頃を境いに停止するらしく、「もし葡萄がなお蔓をのばし這ってゆくなら、ロレンツの日の後では宜しくない」というのも同じで、もはや葡萄の成熟にとって無駄なのである。この頃から雷雨も少くなり弱くなる。「ロレンツは農民のそばで恵みを垂れている、夕立はもはや危害を加えないから」ともいい慣わししているごとくである。「聖ロレンツはコウノトリの尾を叩く」ともいう。コウノトリに秋の到来を告げ、ぐずぐずせず早く飛び立つようにとうながすのである。すでにこの頃から秋がしのびよっている。農民はこれを敏感に感じ、「ラウレンティウスが明るくよい日なら、美しい秋が約束される。」と確信するのである。

われらの聖母マリヤが昇天なさるとき

太陽が明るく輝やけば

多くのよきワインがとれる

めでたいしるしである

八月十五日はマリヤ昇天の日 (Maria Himmelfahrt) で地域によっては盛大な祭がおこなわれ、蠟燭を点して行列行進を行う。当然農耕その他の天気占いが多い。「われらの聖母はよい天気を司る、昇天なさるときには、美しい日々をわれらに恵んで下さるのだ」とか、この頃「初生りの胡桃」ができ、秋の蕪や人蔘、大根などをこの日に蒔くとよいといわれている。また薬草などはとくにこの日から約一ヶ月の間に有効の薬成分が熟するというので「マリヤの三十日」といい、薬草採りが行われる。

バルトロメーが雨なら

それはじゃがいもの祝福だ

バルテルミーに農夫よ、種子を蒔け

干し草の二番刈りをせよ!

八月二十四日は聖バルトロモイ (St. Bartholomäus, バルトロメオ、バルテルミー) の日である。十二使徒の一人でインド、メソポタミヤ、アルメニヤへ福音の宣教を行い、そこで死を遂げた。この日は魚の解禁の日で自由に漁ることができる場所もあり、アルプス地方では早くもアルムから牛や羊を下の村へおろすところもある。この日のじゃがいも掘りには雨でも祝福という程、肥えたよい実になっている。秋蒔きを告知する日であり、二番目の干し草を刈るときでもある。しかしバルトロメオの頃の雷雨はところによっては雹か雪をもたらすこともあり、「聖バルトロモイが来ると、鳥たちは不安と悲しみを感ずる」ともいわれる。八月二十八日(聖アウグスティヌス)

にはつぎのような諺がある。「アウグスティンには、天候は変ってゆく」。もう夏のままではなく、秋へと変る意であらう。

九月

九月の雨は

種子にも家畜にも有難い

秋が暖かで晴れていれば

つぎの年には良いことだ

九月は収穫とともに翌年の種子蒔きの時期であり、適度な雨を喜ぶ。「九月の氾濫（大雨による）は、牧草地には良いことだ」、「九月になお雷雨があれば、樹木はたくさん花をつける」もこれに加えてよい諺である。むろん「暖かく乾いた九月は、多くの果実を豊かにむくいる」のである。

鼠が深く穴を掘ったら

きびしい冬となる

「九月に沢山の蜘蛛が這っていれば、きびしい冬がやってくる」、「九月に沢山のりんぼく、冬には多くの雪」な

ど昆虫や花卉などからやがて迎える冬を予測しようとする。「庭園の遅咲きの薔薇は、冬を待たせている」。薔薇の咲いている限りは、和やかな日々はまだであり、秋を楽しめるのである。

聖エギディウスが角笛を吹く

農夫よ、麦を蒔けといっているのだ

九月一日は聖エギディウスの日である。この聖者は救難聖者の一人で南仏で隠遁の苦行をつづけ、のちにサンギレ (St. Gilles) の修道院を建てた。農耕、牧畜、火に関するもの、ペスト、乞食などの守護聖者として崇拜され、とくに彼の日は重要な天気占いの日の一つとなっている。エギディウスが角笛を吹くのは、種蒔きをせよという意味である。「あなたは麦を沢山稔らせたいなら、エギディウスに蒔きなさい。」ともいう。

エギディウスが良い日であれば

農夫は犁に腰をかけ

チーズやパンを食べ

種子を蒔くのも苦労ではない

聖エギディウスに日が照れば
四週間は明るく澄んでいる

これらの諺には説明を要しない。つぎのようなものもある。「あなたが穀物を沢山とり入れたかったら、エギデ
ィウスに蒔きなさい。新月の前か後に畑に種子を蒔けば、雑草も生えないし、病気もつかない」。古代からの月に
たいする信仰、乃至習俗に基いて、満月のときでなく、新月から満月に向うときに蒔くとよいと考えられていた。
病気は麦の穢りやすいベト病、黒穂病、赤銹病などである。

マリヤが生れた――

農夫よ、種子蒔け！

九月八日は聖母マリヤ誕生の日である。「マリヤ誕生日に種子を蒔くのは、早からず、遅からず」とか「マリヤ
の誕生日に燕は飛び去ってゆく、もしまだいたら、冬は遠くにいる」などさまざまな諺がある。この頃群をなして
燕は南へ渡ってゆく姿が見られる。

聖ランベルトが晴れていると

春が乾くようになる

九月十七日はランベルトの日である。天気占いも夏を冬と対照させるように、秋と春を照応させる。じゃがいも
掘りに精を出す秋は晴れていれば土も乾く。これからつぎの年の春もこの程度の天候であることを願う。この頃
(十二日から十八日まで)は麦蒔きの週である。

マトイスがはいってくるなら
種子を一杯にすべきである

マトイスがひどい雨ではいってくと
寒い冬となる

九月二十一日は聖マタイ（マトイス Matthäus マテウス）の日である。この聖者はキリストの使徒であり、マタイ福音書の著者である。エチオピアに宣教に赴き殉教したと伝える。この日はやはり天候季節の転換的に当るせいか、麦蒔きの最後のときであり、天気占いも多い。マタイがどんな日であるかによって、あとの四週間の気象が決まるといい、「マトイスが笑う代りに泣くとき、ワインは酢になる」とか「この日が晴れて澄んでいけば、つぎの年にはよいワインをもたらず」とかいふ。「マトイスに、カスターニヤの葉がうずたかく落ちてつもの」とか、「マイトスの日が過ぎると、晴れた日のことを余りたづねなくなる」なども具体的適切に季節の変化を見ている。この二十一日は古代ゲルマンの秋の祭の日で、ここにキリスト教はマタイの日を入れたのである。なお翌々日二十三日はゲルマンの暦では一年の始まりであり、現在の秋分の日でもある。

「聖クレオハスに霧が立つと、一冬湿っぽくなる」、「聖コスマスと聖ダミアンには、木の葉は色づきはじめる」。九月二十五日聖クレオハスの日、二十七日がコスマスとダミアンの日であるが、霧が立ち、木の葉が目立って色づく。季節はどんどん秋へ深まってゆく。「コスマスとダミアンは、蠟燭を点す」という諺もある。日が短かくしかも弱くなり、冬に向う生活にはいる。

ミッヘルは

鎌をとる

ミッヘルに雷が鳴ったら

鎌をたくさん使つて刈る

ミヒヤエルの日の前には片手で――

しかしミヒヤエルの日が過ぎたら、両手で種子を蒔け！

農民はミヒヤエル大天使を親しみをこめて「ミッヘル」と呼ぶ。ミカエル (Michael) は天使群の首長で武装して神の軍勢を指揮し、悪魔と闘う力強い大天使である。受胎告知を告げるガブリエル大天使 (三月二十五日) に照応するかのように九月にはミヒヤエルを守護天使として祭る。元来この日はゲルマン古習俗では秋の収穫の祭の日で、同時に死者の祭儀も行われ、主神ウォーダンが死者を導き、審くのにたいし、キリスト教は年に一度人間を審く天使、ミヒヤエル天使をここに据えたのである。しかし庶民にとってミヒヤエルは農民を悪や災いから守る存在となり、この日は秋の収穫の目標ともなった。この二行づつの諺は対になっているものである。このミヒヤエルの日までの麦蒔きはのんびりしてよいが、その後の麦蒔は忙いでせよの教訓である。「ミヒヤエルが雷を鳴らせば、多くの者は鎌で仕事をす」といっているように、この九月も終り頃の雷は収穫の終りを告げる雷である。農民は精出してとり入れをしなければならぬ。他方種子蒔きについては「ミヒヤエリから聖ガル (ガレン) までには、ど

んなことがあっても、種子を蒔け」、「事実ミヒヤエリの頃、冬蒔きの種子は最高に生長する」。などこの日を中心
に農民にとって大切な教訓になっている。その他「聖ミヒヤエルが蠟燭を点し、娘はそれで糸を紡ぐ」などは、
「マリヤの光のミサ」、「受胎告知」と正反対に日が短かく弱くなるので、部屋の灯りを多くともすようになる。ま
た女性の夜なべ仕事のはじまる。「どんぐりがミヒヤエルの前に落ちれば、夏は早くも姿を消してしまう」とか、
「ミヒヤエル」に胡桃を窪みに拾う」などには秋の深まりを感じさせる情感が漂っている。

聖ミヒヤエルが明るく晴れていれば

なお四週間よい日がつづくだろう

ミヒヤエルの日も占いの日として重んぜられ、この日の天候が以後の天候を左右すると考えている。「ミヒヤエ
ルの前の夜が晴れていれば、寒い冬がやって来る」という諺もある。

ミヒヤエルにすももが青くなったら

葡萄の実をよく注意するがよい

葡萄摘みをしなければならぬ葡萄園主や農民は、実の熟してゆく様子には注目を払っている。この頃熟するもの
を「ミヒヤエルワイン」という。「ミヒヤエルワインは、甘くて美味となる」とか、「ミヒヤエルワインは、立派な
ワイン ガレ ワインは舌足らずのワイン」ともいう。サン・ガレン (San Gallen) 又はガレの頃では遅過ぎると

いう意である。このようにミヒヤエルの日には収穫、成熟にも、種子蒔きにも大切な節目となっており、その前夜蠟燭をとます。これをミヒヤエルの火と呼ぶ。それは祭のためであるが、冬の来ることを予め報せる火でもある。

「ミッヘルが光をともし、ヨセフが消す」ともいうように、冬季の火の始まりはミヒヤエルの日とし、ヨセフ（三月十九日）が消して春季の農耕の始まりとする意である。「聖ミヒヤエルが蠟燭を点し、娘がそれで糸を紡ぐ」この頃から冬の夜なべ仕事の糸紡ぎもはじまる。しかし聖ミヒヤエルの日は一切の仕事を中止して、火を点し、御馳走を家族や傭人たちが一しょに御馳走を食べるのが古くからの習俗となっている。

十月

十月に雨がどのように荒れるかによって

十二月の嵐（吹雪）の吹き方がきまる

十月と三月は

あらゆる点で似ている

十月は「ワインの月」ともいわれ葡萄摘みの季節であり、九月について収穫、種子蒔きのときである。十月の天候から冬の厳しさ、雪の状況などを予想する。また小春日和の温かさという意味で十月と三月の類似をも感ずる。十月はさらに霧が多くなる。「十月に霧が多ければ、冬は沢山雪が舞う」ともいわれている。

十月の終り頃の雨は、豊年で終る

十月が寒く晴れていれば

翌年の芋虫の幼虫を凍え死させる

麦、じゃがいも野菜類、果実、葡萄摘みなどすべての収穫を終え、翌年の種子蒔きもすんだあとの静かな雨は、まさに慈雨であり、豊年で終ったしるしでもある。「十月の太陽はワインを沸き立たせ、大きな籠を一杯に満してくれる」という諺も同じである。十月の和やかな太陽の光の中で醗酵するワインの泡立ちを見、畑のもので籠が一杯になる収穫を見て農民はすべての労苦が酬いられた満足感にひたるのである。ヨーロッパの秋は澄んだ空がひろがり、秋特独な落着きを見せるが、しかしその日時はあまりに短い。「十月の空に星が一杯でていれば、暖かいストーブをほしくおもう」。夜寒を感じる事が多く、曇りが降る日もある。時によって「十月に霜と雪がくれば、冬にたいしああ無情と嘆く」こともある。しかし「十月が寒ければ、毒虫を殺してくれる」こともある。反対にほかほか暖かくて蚊などが発生することがある。「十月の蚊にだまされるな！」という諺がある。暖かいといって安心していると、どっかと寒さがやってくる事が多いからである。「十月に樹々の葉がまだついていると、クリスマスにはまだ埃がある」。これは雪が降らず暖かい冬の意味である。「十月に樹々に葉がまだついていると、厳しい冬に事欠かぬ」ともいう。同じ現象にたいしちがった結果を予想しているのは、十月の不安定を示すものである。

野鼠が村にやって来たら

薪や泥炭のことを心配せよ

樵の実がよく実り

胡桃やどんぐりが一杯なっていれば

厳しい冬がやって来て

どかっと雪を降らす

野性の動物、鳥、昆虫、植物などから到来する冬の模様を知ろうとして、農民はよく観察してきた。野鼠の移動もその一つで厳しい冬が来ると判断し、薪や泥炭を沢山貯えよと教えている。「蜜蜂が季節どおりに封泥すれば、厳しい冬が乗り込んで来る」とか、あるいは「鴉が集って宴会していたら、(ストーブ)の薪を探せ」も同じである。「兎が十月に夏毛をつけていれば、おそらく冬はまだ遠い」という諺もある。「鴉が遠くへ飛んでゆかなくなる」と、種子時には最高のときである。「鹿が発情にはいったら、あわてずに麦を蒔け！」これらはいずれも十月の自然の状態で正しい伝えられたものである。木の実のつき具合以外に樹木の葉の様子からいう場合がある。「白樺や柳の樹の葉がてっぺんに長く残っていれば、時宜に適う冬であり、よい春となる」といい、「樺が葉をつけていけば、きびしい寒さの冬がやって来る」ともいう。

十月の雪は

沢山の穀物をつくり出す力をもつ

十月が多くの雨をもってくる

彼は神の農夫をもつて自らを任じている

三月頃春雷とともに自然は目覚め、すべてのものは芽吹いたり、活動をはじめ、人間も農耕にはいる。夏には劇しい雷鳴電光をともなうこともあるが、すべてのものを稔らせる。やがて九月、十月には弱い雷がとどろいたり、雨を降らせて冬にはいる。ヘブライ宗教のヤハウェは電光雷鳴の比喩を藉り、ギリシヤの宗教も主神ゼウスは電光雷鳴の威厳をもつて表象された。古代ゲルマンの神ドナール (Donnar) も文字通り雷神である。電光雷鳴のおそろしさもあるが、雷は季節を示し、大自然の意志を伝えるものであり、稔りを促す力でもあった。それゆえ十月の雷は蒔いた穀物に生育する力を授けるものとして喜ばれた。大体ヨーロッパでは十月頃が雷の発生の最後である。余談になるが、日本の神無月は神々が出雲に集るので神社を不在にするというのは、かなり一般化して広まっている。神去り月の意味で、雷鳴をとどろかすことがなくなったことであらうとわたしは解している。日本でも春雷とともに自然が目覚め、秋雷によって自然は眠りに入ることに変わりはない。神無月はおそらく出雲あたりの神官の解釈が拡まって定説のごとくなったのであらう。

「十月の終りはすべてを聖者の手に渡す」。一年の収穫は葡萄摘みを最後に終了し、つぎの年の種蒔きもすみ、「すべてを月々の守護聖者の加護に委ねるわけである。枯葉や蘗屑、一年間の生活が取り散らしたものの上に雨や霰、あるいは雪も降ることがある」。「汚れたものに初雪が降る、それは厳しい冬から守るためである」。やはり大地へのいたわりのような想いを農民は感ずる諺である。

聖ガルは

新雪を降らせる

聖ガルに

山を耕やし、谷に種子を蒔け！

聖ガルのあとには

家畜は小屋で過ごす

十月十六日は聖ガルス (Gallus, ガレン、ガルともいう) の日である。アイルランドから大陸に渡り、隠遁の伝道者で最後にスイスに来て、現在のサン・ガレンの地に修道院が建つに至った。森での隠遁の間、熊を同伴にしていたという。この十六日は古い習俗では冬の始まりとしていたので、農村、山村で重要な日である。山地では雪が降りはじめ、村では冬の寒さに耐えるために屠殺をし、肉の貯蔵をした。むろん家畜はすべて畜舎に入れて冬の生活にはいる。すでにミヒヤエルの日に触れたところによっては聖ガルスの日までに種子蒔きを完了しなければならぬ。「聖ガレンの日に林檎を袋に入れて貯えなければならぬ」し、最後のじゃがいもも掘らなければならず、農民にとって多忙なときである。「ガルスが来たら、キャベツを切り落せ、——キャベツは冬ぐんと美味しくなる」。こういった仕事もある。

ガレには

鳥はみんないなくなる

ガレが過ぎると

園は閑散となる

仕事を一息ついてまわりを見ると、もうほとんど渡り鳥は渡りきって姿を見ない。「園」は果樹園や葡萄園はみな摘み取って人影もなくひっそりしている。

冬蒔きの麦の種子は

聖ルカスの日まで

ルカの日が和やかで温かければ

神があわれんで下さる冬が来る

十八日は聖ルカの日である。ルカは福音書の著者で本来医を業としていたが、パウロに随って伝道にたづさわりのパウロや使徒の行動を叙述したのが、使徒行伝である。医師、画家などの守護聖者である。大体種子蒔きは聖ガルスまでであるが、ルカを最後の限度としている。その他に「ルカの頃ロッケン（裸麦）を蒔くひとは、その年悔いることなし」とか、「福音家聖ルカは、肥料なしのおそまきの小麦をもってくる」とか、「ルカから聖シモンの日まで、芋虫の巣を打ちこわせ」といった葉が落ちたあとの害虫の巣をこわすことなども忘れてはならぬ仕事の一つ

である。ルカの日が小春日和 (Alte Weibersommer おばあさん日和) であれば、冬はかならず「神のあわれむ冬」となると占われた。十月中旬の小春日和を「ルカ日和」(Kleine Lukassommer) とも呼んでいる。

聖ヴェンデリンよ、われらをけっして見捨て給うな！

われらの小舎をかばい

われらの家畜を守り給え！

十月二十日は聖ヴェンデリン (St. Wendelin) の日である。スコットランド王の王子として生れたが、信仰の道歩み、羊飼いとして生活し、のちにベネディクト修道院で歿した。人間や家畜の病気の守護聖者である。この諺だけは祈りの詩句の一節のようである。しかし冬を迎えた農民の切々とした気持が表われている。地方によってはヴェンデリン騎行を行って村を見廻る行事もある。

二十一日の聖女ウルスラの日には、「干し草を取り入れよ、さもないとシモン・ユダの日に雪が降る」、二十五日の「クリスピンの日には、蠅が見えなくなる」という諺があるように日毎冬へ向う予感である。

シモン・ユダを見たら

樹木の手入れをし干し草を切りなさい！

シモン・ユダ、この聖人たちは

暖かいタイルのストーブに坐りたがる

十月二十八日は聖シモンとユダの日である。この二人の使徒はメソポタミヤへ伝道して殉教を遂げたと伝えられている。諺に「シモン・ユダが過ぎると、冬が乗り込んでくる」、「シモン・ユダの御二人はしばしば雪を連れてくる」といつているように、冬の到来は間違いない。暖房も本格的ながつちりしたものでなければならぬ。むしろ冬に備えての樹木の手入れ、家畜のための干し草切りに精を出さなければならぬ。このように冬の到来、雪の降ることへの不安と期待は、秋の遅速によって聖ミヒヤエル、聖ガレン、聖シモン・ユダ、聖マルチン、聖アンドレアス等々何度も同じような諺が地方によって語りつがれているのである。

十一月（聖マルチン祭以前）

十一月に水が昇れば

春には沢山の雨が降る

十一月の雪は

種子を悲しませることはないだろう

十一月にはいると、霧がかかることが多く北風も吹き、最後の木の葉まで散らしてしまい、大体に乾いた気象となる。「天に水が昇れば」翌春には雨となって大地を潤おすという意味である。「十一月に水が昇ると、どの月もよ

く昇り、つぎの夏は湿りがあり、ものの生長も良くなるだろう」という諺はここに掲げたことをさらに詳しく語っている。十一月にはすでに麦の種子は蒔き終わっているので、雪が降っても、春まで冬の厳しさから保護され眠ることになる。だから種子を悲しませ、駄目にするのではないと教えているのである。

干し草を良くしようと思うなら

十一月の牧草地を潤すがよい！

この月に牧草地を乾燥させ、水気をなくしてはいけない「十一月に多くの湿りは、牧草地に多くの草」も同じで、適度な水の潤おいを必要とすることを教えている言葉である。日本とちがい、十一月は可成雨がにつき、ときには北風をまじえて荒れ、雪が降って河川の増水、氾濫が生ずることもある。

十一月の雷は

大麦小麦を産む力を持つ

十一月に電光、雷鳴があれば

次の年農民は笑う

雷については、ゲルマン人は独特な崇敬感を抱いていた。雷神ドナール (Donar, Thor) のことについては、す

でに十月の諺でふれたごとくである。「十一月の雷はよい夏を約束する」も大自然の神々の意志のごとく雷鳴を感じ取したのである。しかし十月に比べ、十一月の雷は珍しい現象として受取られていたのではないかと思う。

十一月に多くの狐が啼き立てば

冬は多くの雪をもってくる

十一月に樺が固ければ

ひどい寒さとなるだろう

動物や植物の状態からその年の冬を予測する例は多い。「十一月にヤマネがあちこち走りまわれば、冬は長くつづく」とか「十一月の風は、羊や仔牛を尻込みさせる」なども同じで、農民はよく観察している。樺の樹液が止まれば、乾燥して固くなる。植物は早くも冬の寒さを予知して眠りにはいるのである。

大地は祈禱のヴェールをかぶらなければならぬ

冬のまどろみが元氣を与えるにちがいない

大地をおおう雪を折りのときの白いヴェールに見立てているのは味わい深い。一年の仕事を終え静かな祈りにはいったように見るところに、農民自身の自然と人間の合一がある。大地も人間もこの冬のまどろみで再び活力を得、

春によみがえるのである。

万聖節に太陽が輝やけば――

小春日和がやって来る

万霊節が寒くて澄んでいれば

クリスマスにはすべてが凍りつく

十一月一日が万聖節(Allerheiligen)である。特定の祭日や記念日をもたない多くの聖者をこの日に祀る。つづいて十一月二日は万霊節(Allerseelen)で死者の霊を祀る日となっている。先住ケルト人は収穫を終えたあとの十一月を年の始めとし、同時に先祖や死者の霊を祀る祭をおこなっていた。これに合せてキリスト教も万聖節、万霊節の祭を行っている。十月の聖ルカの頃と同じように、小春日和になることもあり、これを「マルチン日和」とも呼ぶところがある。万霊節の天気でクリスマスを予測する諺もある。この頃は自然の収穫と同じように一年の行事の一切の締めくくりであり、このあとの聖マルチン祭はまさに生活の総括となり、新しいクリスマスを迎える前哨の祭であるといえる。

(昭和五十九年四月十五日、未完)